

現地たずね 実相まなぶ

第32回平和ツアーin 沖縄

日本医労連第32回平和ツアーin 沖縄が、5月24日～25日の日程で、2全国組合11県医労連41名の参加で開催されました。参加者は、バス内や各施設で、平和ガイド・山田義勝氏（沖縄県医労連）の説明で、第2次世界大戦時の沖縄の様子から、アメリカ統治下の沖縄、現在の基地問題や基地建設に反対する運動について、学び交流を深めました。

【1日目】ツアー開始の2日前から梅雨入りとなった沖縄県。時折土砂降りになる雨の中でツアーは進行しました。那覇空港を出発した参加者は、沖縄本島の北端、奄美大島や鹿児島県までつながる国道58号線をバスで北上。車内から、全面返還が合意され50年が経った今でも移設条件があるため返還されていない那覇軍港と、牧港補給基地を見学しました。

次に、嘉数高台公園でオスプレイが並ぶ普天間基地を眼下に、沖縄県が抱える基地問題について説明を受けました。嘉数高台は、



沖縄戦で最大級の激戦地だった場所です。参加者は、公園内に残された「弾痕の堀」や、トーチカ（防御陣地）を見学し、第一防衛陣地でのアメリカ軍との攻防戦の状況について説明を受けました。（▲弾痕の堀の前で説明を聞く参加者）

嘉数高台公園を後にし、さらに北上したバスは、嘉手納基地が一望できる「道の駅かでな」に到着。嘉手納基地に離発着する航空機のパネルを前に、爆音被害の状況について説明を受けました。

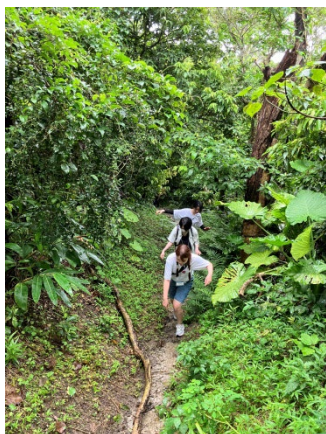
（▲離発着する航空機のパネルの前で）

【2日目】ホテルを出発した参加者は、辺野古新基地建設現場を一望できる「瀬嵩（せだけ）の浜」で、名護平和委員会の上野氏より、新基地建設の状況と、2006年から続く新基地建設反対の取り組みについて説明を受け、連帯のカンパを手渡しました。

（▶吉田団長がカンパを渡す）

午後には、沖縄県の南部に位置する南風原文化センターに移動。小高い山（小金森）に掘られ沖縄陸軍病院として使用された南風原壕群20号を見学、その後、南風原文化センター内の資料館で学習を深めました。20号壕から文化センターの間には、壕から離れた炊事場から、2人1組のひめゆり学徒が、ご飯の入った重い樽を担ぎ棒に下げ、危険をくぐり抜け運んだ「飯上げの道」が残されており、参加者は前日の





雨にぬかるんだ急斜面の山道を歩き、追体験しました。
 (◀ぬかるんだ急斜面の「飯上げの道」に苦戦する参加者)

【 3日目 】沖縄県の南部に位置する糸数アブチラガマを見学。アブチラガマ

は、全長270メートルの自然洞窟（ガマ）で、日本軍の陣地壕や倉庫として使用され、戦場が南下するにつれて南風原陸軍病院の分室として使用された場所です。参加者は、真っ暗なガマの中を懐中電灯の光のみを頼りに進みながら、当時の状況に思いをはせました。(▶アブチラガマ前で)

次に、沖縄本島最南端にある平和祈念公園に移動。平和祈念資料館や、沖縄戦で亡くなった人々の氏名を刻んだ「平和の礎」などを見学し、「住民の視点で捉えた沖縄戦」について学習を深めました。



～ 参加者の感想 ～

❖国籍を問わず、生きたくても生きられなかった人がいたこと、人間として扱われなかった事実があったこと、忘れかけていた自分を恥じました。沖縄だけでなく日本や世界中で痛ましい戦争が起こったことを改めて自分の中に刻みつけ、忘れることなく伝えていきたいと思います。もし、みんなが忘れてしまったとき、また人間は決して犯してはならない過ちを犯しそうになると思うから。

❖今回のツアーで沖縄の戦争について、軍事基地の問題から平和について学ぶことができました。戦争の悲惨な状況から誰が悪いわけでもなく敵も味方もたくさんの方が悲しい思いをしたこと、今ある軍事基地が平和に対する思いや祈りを踏みにじっていることが分かりました。平和ツアーに参加する前は昔の出来事として戦争を捉えていましたが、今でも根深い問題で私たちにも関わる大事な問題だと感じました。

❖今まで言葉でしか知らなかった沖縄戦を、沖縄の各地を訪れることで実感を持って自分に取り込めた。日米地位協定という日本と米軍の歪な関係性や税金の使われ方にも目を向けるきっかけとなった。瀬嵩の浜では、土砂を積載するために船が押し寄せていて異様な光景だった。また、自然の中でイルカやジュゴンを見ることがなくなってしまったと聞き非常に残念に思う。沖縄の海の生態系は、美ら海水族館内の生物のほとんどを賄うほど多様であるにも関わらず、ここから搬出される土砂は、絶滅危惧種含むたくさんの生物が生息している海を埋めるために使われる。長い年月をかけて育まれた豊かな自然を蔑ろにする行いに言葉も出ない。南風原文化センターでは、戦争当時の生活の様子や戦時教育の歪さに触れた。戦後には、沖縄の人々が懸命に暮らしや文化を取り戻そうとする様子が年表とともに展示されていた。入り口に飯上げの桶の重さを再現したものがあって、担がせてもらった。この重さを担ぎながらあの坂道を走って登るのは大人でも難しい。ましてやどこから攻撃されるかもわからない恐怖の中で。平和記念資料館に寄せられている当時の証言の中には、泣くと敵に居場所がばれて不都合だからと子どもを手にかける兵士、道に見捨てるしかなかった母子、家族を手にかけて自分も殺してくれと頼む父など、凄惨な事実が列挙されていた。また、強制的に動員させられた朝鮮の方々の苛酷な状況、故郷に帰ることができなかった無念さを思うことができた。人格、故郷、風土、文化のすべてを踏みにじり、膨大な戦後処理は後の世代に押し付けられる。さらに戦争に関わった国々に生じる軋轢は今後も残り続ける。このような戦争の実態を目の当たりにすることで、平和教育こそ人権、尊厳を守ることの根幹であると強く感じた。